

『おおいしだめとんとむがすあつたけど』③

さおとめ

早乙女地蔵(鷹巣地区)



今から三百五、六十年も前のことです。

村人から神様のように崇められていた名主がおりました。

その名主の名前は「七郎兵衛」と呼ばれていて、この村では知らない人はいりません。この名主さんは、大変信仰心のある人だったそうです。自分の屋敷の中に地蔵様を祀って毎日拝んでおったといひます。

ある年のことです。六月も半ばの頃となつて、田植え仕事も真盛りとなりました。どこも、かしこも田植え仕事で、忙しいの、忙しいの、てんでこ舞でした。

名主七郎兵衛さんの家でも、田植仕事の準備がはじまったが、苗取りの女衆がいなかったので、これはこれは大変困りはててしまいました。名主さんは、あちら、こちらと苗取り仕事をたのみに行つたが、誰一人手のあいている人はいりません。困り果てた名主さんはある朝、東の空がようやく明るくなりかけた頃、いつものように、地蔵様に拜んでいたら、名主さんの前につかつかと、美しい働き盛りの娘が一人近づいてきました。娘は、

「私はあなたの家で、苗取り衆がいなくなつて大変困つている。どうか一日働かせて下さう。」
といいました。

名主さんは驚いて、
「お前は一体どこからきたんだ」と尋ねても、娘は、

「遠い所からきました。」
というだけであとは答えません。
身じたくをした娘は、さっそく苗取りの仕事に取りかかりました。

名主さんは、大変喜んで、働いてもらったものの、どこの誰だかも知らないでは、御礼のしようもありません。どうも納得いかずに右往左往しているうちに、お昼近くになつてしまいましたので、苗取りの所に行つてみたところ、またもびっくり、どうしたことでしよう。

十人でも一日で終えられない苗取り仕事で、きちんと終わつて、田植えができるばかりに並べられてありました。

名主さんは、

「オーイ娘や」「オーイ娘や」

と何回か呼び回つたが、返事はなく、どこにも姿が見えませんでした。

名主さんは不思議になつて、あちら、こちらと見回つたところ、ぬれた足跡がついておりました。それをたどつて行つてみたら、毎日拜んでいる地蔵様のお堂に入つて行つた足跡がついておつたのです。

それで名主さんは、はつと思つて地蔵様の姿を見たところ、地蔵様の足が泥まみれになつておりました。

名主さんは、これはと気がつき、地蔵様に昼の御馳走と、夜の御馳走を供えて拜んだといひます。

それから名主さんは、村の人々にこのできごとを話しました。それからというもの、名主さんの田植えの時には若い男女が大勢手伝いに来て、名主さんの田植えが終わつてから、自分の家の田植えをするようになってしまいました。

この地蔵様は、今も立派な札所となつて、安産の神様として、お参りの方があつたとたないといひられております。

楯高資料による

○出典 滝口 国也／編著

『北村山地方の民話(伝説編)』



町の人口 令和元年5月1日現在

世帯数	2,348 戸	(+5)
総人口	7,043 人	(-25)
男	3,459 人	(-13)
女	3,584 人	(-12)

(4月中の異動)

出生	0 人	転入 17 人
死亡	10 人	転出 32 人

※この数字は外国人数も含めた数字です。

楽がき帳

ニユース玉手箱で紹介したギフチヨウ・ヒメギフチヨウの産卵数調査に同行しました。秋に土砂崩れがあつたことや、産卵時期が例年より遅れている影響で産卵数は昨年比べて少なめ。

調査開始から2時間ほど経過し、ちよつと疲れてきたな：なんて思っていると、ひらひらとヒメギフチヨウが目の前に！斜面に生えている草にちよつと肢をのせてはまた飛び立つことを繰り返し、卵を産み付けるのに適した草を探している様子。しばらくすると幼虫の食草になるトウゴクサイシンの葉に逆さになつて、とまりました。斜面に這いつくばるようにして、チヨウが産卵する様子をじっくりと撮影しました。生んだばかりの卵は、小さな緑色の真珠のよう。とても貴重な体験になりました。(あ)